資料２

本県の教育についての各関係者との対話（意見交換）

第３期教育大綱・第４期高知県教育振興基本計画の内容の実効性等を高めるため、
以下のような様々な関係者・当事者の方からご意見をいただく取組を実施。

対話（意見交換）を行った関係者

■高等学校・特別支援学校高等部に通っている生徒（「次世代総合教育会議」）

■教職課程を履修する大学生

■若年教職員（東部・中部・西部・高知市の４会場で実施）

■保育所・幼稚園等の若年職員

■PTA役員（小中・高等）

■経済界の代表者

■コミュニティ・スクール関係者＜予定＞

↑高知県教育委員会YouTubeチャンネル「とさまなチャンネル」で「次世代総合教育会議」の様子を公開中
https://youtu.be/lsn2nN17GiQ

高等学校・特別支援学校高等部に通っている生徒との対話

令和６年度も県内の高校・特別支援学校高等部の生徒５名からなる「次世代総合教育会議」を開催しました。
それぞれ高校生の委員から「理想的な学校の姿」について発表をいただき、委員同士や知事、県教育長等と意見交換を行いました。

●令和６年度　次世代総合教育会議（令和６年８月２２日開催）における各委員の主なご意見の概要

高知国際高等学校 澤田 千代子 委員

・理想的な学校は、「**地域との関わり、つながりのある学校**」。地域に信頼され、学校だけでは学べない、さらに幅広い社会的な学習を行いたい。

・私たちは探究活動を通して学び方を学んでいる。授業と試験とのつながりが十分ではないと言ったが、その学び方を生かして、どう勉強したらいいのかなどを考えられる。探究活動の捉え方を少し変化させるだけで生涯の強みになる。

・校内のインターネット回線の改善や学年を超えた協働編集により「**効率的で効果的な探究活動**」を進めたい。

高知農業高等学校 坂本　琉恋 委員

・理想的な学校は、１つ目に「**年齢・学校関係なく、いろんな人と関われる学校**」。コミュニケーション能力を身につける機会が必要。

・２つ目に「**受けらされるから受けたいと思える授業がある学校**」。みんなと協力して問題を解決していくことは楽しく、聞いているだけの授業より授業を受けたいと思う。主体性を育むためにも、こうした授業が当たり前になればいい。

・３つ目に「**体験型の授業に力を入れる学校**」。端末も活用しながら体験型の授業を行うことで、自分の進路のヒントを見つけられる。

高知若草特別支援学校 小松　璃沙 委員

・理想的な学校は、「**ゆとりのある学校**」「**やりたいことに余裕を持って取り組める学校**」

・休み時間、昼休み、下校時間の延長など、時間的なゆとりが持てれば、授業の準備や友だちとの雑談など、焦らずゆっくりできて、心身ともにゆとりが生まれる。

・時間の調整と合わせてカリキュラムを見直すことで、自分の進路に合わせて選択の幅を広げることができる。

・生徒たちで主体的に活動するための時間「じゆ学(まな)プロジェクト」を作ることで、人との関わり方を身につけることもできる。

土佐塾高等学校 田中　達仁 委員

・高知県はこれから国際色が豊かになっていくだろうと推測できる。さらに実生活でも英語のスキルは必要。そのことも鑑みて、提案を２つする。

・１つ目は「**英語教育の強化・向上**」。まず英語に触れる機会を増やすことが必要。そのために、留学に関する支援や留学生を県内の学校にどんどん受け入れていく。ICT機器の活用は今後のキーになる。

・２つ目は「**英語外部試験の奨励**」。英語の実力を可視化することで、自信はもちろんつくし、英語を生かす仕事に就こうかという将来の選択肢にも入ってくる。なお、検定料や会場の手助けがあればよい。

檮原高等学校 石原　憧真 委員

・理想の学校は、「**誰もが不満を感じることなく社会に出ていくための力を身につけ人間として成長できる場**」

・校則には、あいまいな点が多く、古く、多様性を感じられないものがある。多文化で多様な価値観がある本校だからこそ、生徒が主体となって、教員と地域と一体となり協力し、校則の解釈をすり合わせることが、第一に必要。

・多様性を認め合うことで、成長にもつながる学びを得ることができ、様々な活動においてアイデアを増幅することにもつながり、より多様で多文化的な学校ができあがると思う。

若年教職員と県教育長との「対話」

主な趣旨

- ✓ 第３期教育大綱・第４期高知県教育振興基本計画の初年度である令和６年度において、当該大綱・計画に示した考え方や内容を広く学校現場にもご理解をいただくために、**教育大綱等について教育長が現場の教員に伝えるような場**を設定する。
- ✓ 若手教職員（県外出身者も含む）の**日々の業務の状況、やりがいや悩み等を教育長が直接聞く場面**を作ることで、現在の学校現場等の状況について「生の声」を把握し、**県の教育施策等の運用に生かす**。
- ✓ 日頃接しない同年代の別校種の教職員と触れ合うことで、**教職員同士の交流が生まれる寄与**とする。

- ▶**高知市会場　令和６年８月２日**
- ▶**中部会場　　令和６年８月５日**
- ▶**東部会場　　令和６年８月８日**
- ▶**西部会場　　令和６年８月26日**

↑高知県教育委員会YouTubeチャンネル「とさまなチャンネル」で対話の様子を公開中　https://youtu.be/V6ZLOloDF3U

高知市会場

令和６年８月２日（金）14:00～16:00　県立高知国際中・高等学校　プレゼンルームで開催
若年の小学校教諭と養護教諭、中学校教諭、高等学校教諭、特別支援学校教諭の５名の先生方と長岡 県教育長が対話

【先生になって「やりがい」を感じた話】

・「分からない」っていう子に対して、最初はどうしていいか分からなかった自分が、子どもたちと一緒に「分かる」っていうふうに持っていけた時、すごく嬉しい。

・卒業式の後に「先生のおかげで中学校が楽しく過ごせた」とか子どもの言葉でそういう話を聞けた時っていうのは、一番この仕事をしていて良かったなというか、どれだけ大変なことがあってもやめられなくなる。

・部活動での生徒との関わりがすごくやりがいに感じる。本気でやったことが、一つ終わりを迎えた時に、感極まって涙する経験が、この「教師」という仕事はたくさんできるのかなと感じている。本気で涙して、悩んで、毎日過ごすことができるこの「教師」という仕事はすごく素敵だなって感じる。

【先生をやっていて面白かった話】

・今働いている学校では、教員全体でアイデアを出し合いながら授業づくりや計画しているが、その工程がすごく私は好きである。みんなでそこに向かって作り上げていく空気感があって、仕事なんだけど楽しませてもらっている。

・先生方は経験年数に関わらず、すごく和気あいあいとしてて、毎日みんなで（子どもたちのことを）共有しているような学校である。みんなで子どもたちを見ているところは、すごく「チーム学校」を感じる。

【県外出身の先生が思うこと】

・毎日試行錯誤。暮らしも大変で、言葉もたまに調べたりしながら、分からないなと思ったりしている。

・高知県の人の「あたたかさ」にすごく救われている。そういうところで教員ができるって幸せ。高知県に来て良かったなというふうに思う。

・授業の中にもっと「高知の良さ」みたいな、高知の特色を出してもいいと思っている。海はあるし、山はあるし、ご飯はおいしいし、人もあたたかいし、日本や世界に誇れる文化とか芸術もある。それをもっと高知の子どもたちに知ってほしいなと思っている。

・最初採用するときに、「土佐弁講座」みたいな、高知の文化をもっと知れたらいいなと思った。高知の良さをもっともっと知りたいと思う。

【学校における働き方改革について】

・（学校）規模に対して先生が少ないと思う。人がもっと増えれば、教員をやってみたいと思える人が増えてくれかもしれない。教員は大変だけど、「やりがい」があることを、今教員をしている人たちが伝えていくことも大事だと思う。

・働く親世代として、高知の福利厚生がすごくしっかりしている。しかし、新しい環境になった時に、「看護休暇や年次休暇がもうない」と、ドキドキの中で生きている。もう少し何か（仕組み）があると、私と同じ働く世代の先生方も安心材料になると思う。

・業務の量は実際多いと思う。特に、ICT教育等の初めてのことでチャレンジが必要なことは、必要性は分かるのでみんな取り組むが、どうしても時間はかかる。

中部会場

令和６年８月５日（月）14:00～16:00　県立須崎総合高等学校　図書館で開催
若年の小学校教諭２名、中学校養護教諭、高等学校教諭、特別支援学校教諭の５名の先生方と長岡 県教育長が対話

【先生になった理由】

・教育実習での先生との出会いがすごく大きい。（実習先の）先生に「先生、すごく困っているよね。でも、それでいいんだ。指導に正解はないから、そうやって迷いながらも、子どもたちのために考えてくれる先生は、本当にいいと思う」という言葉を頂いて、「先生になるぞ」と思うことができた。今もそんな言葉を胸に、日々指導をしている。

【先生になって「やりがい」を感じた話】

・私の経験の全部を、子どもに生かすことができると思っている。日常の些細なことでも、子どもの学習とつなげられるということに、面白さとかやりがいを感じる。

・勉強が得意ではなかった私が、目の前の子どもたちに覚えさせたいから、研修を受けよう、本を読んでみようと変わっていく自分に驚いている。学校は子どもも先生も成長できる場だなと感じる。すごくすてきな仕事。

【先生になって「大変」だった話】

・初任者研修の課題が多い。初任で不慣れななか４月入って１週間、もう本当に何も分からない状態で、手取り足取り教えていただいた。でも逆に、研修が多いからこそ、今いろんな人とつながりがある。

・１年目に部活動の顧問を持ったけれど、自分はそのスポーツの競技歴がなくて、経験がある生徒の前に立ったときに、何も言えないという局面が多々あった。そんな中でも、当時の生徒たちから、逆にたくさんのことを教えてもらった。

・自分も部活動や年次研修、保護者対応、授業準備など、同じように苦労してきた。でも逆に、そういった時期もすごく大切であったと思う。

【部活動改革について】

・部活動を外部委託して競技指導をしてもらう取組も、積極的にやっている。やはり、そういった取組は、これからも高知県全体で進んでいければというのはつくづく思っている。

・部活動運営については、市内であればいろんな外部人材がいると思うが、田舎であればあるほどそういう人材がいないので、そこも考えていかなければならない。

【学校における働き方改革について】

・教員はすごく忙しいというイメージがあるかと思うが、でも結構年休とか夏季休暇とかもあって、比較的休みが取れる。メリハリがあって、この教員の仕事はいいのかなと感じている。
ただ、帰りは正直、定時退勤することは難しい。

・学校の多忙化というか、余裕が先生方にないなかで、先生間でつながりを持ったり、雑談ができたりする時間がないというところに課題を感じている。若年の先生同士で話す時間や先輩と話す時間というのが、自分たちだけでは作りにくくなっているのかなというところもある。

・県内も全国的にも、教員数が足りていないという状況の中で、教員の楽しさというのが十分伝わっていないと感じる。
教育委員会には、教員って面白いということを、YouTube「とさまなチャンネル」で発信してくれているが、いろんな方法で発信してもらいたい。

・教員のやりがいについて、高知大学の教育学部生に若年教員の先輩からがアドバイスをしたらどうか。

東部会場

令和６年８月８日（木）10:00～12:00　県立安芸中・高等学校　プレゼンルームで開催
若年の小学校教諭と栄養教諭、中学校養護教諭、高等学校教諭、特別支援学校教諭の５名の先生方と長岡 県教育長が対話

【先生になった理由】

・栄養教諭を目指すようになったきっかけは、給食が嫌いだったということ。その中で食育の授業や食に関する経験をしていく中で、自分もこれからの子どもたちに、そういう食べることの大切さを伝えたいと思った。

【先生になって「やりがい」を感じた話】

・やりがいは、卒業生を出したときに感じた。一番（教員を）やってよかったなと思った。辛いこともなかったことになるぐらい、やっぱり感動的。卒業式で名前を一人一人呼ぶ瞬間が、これからの自分の支えになると思う。

・人生の３年間だけど、一緒に（子どもたちと）過ごし、自分自身も成長させてもらって、子どもたちの成長も感じることができるというのが、一番、教職のやりがい。

・４か月の中で、これだけ子どもたちが成長していくんだっていうことで、これからどんな成長をしていくのかなっていうのがすごく楽しみだし、やりがいだなあと感じています。

・部活動の３年生最後の大会で、準決勝で負けたとき、キャプテンが泣いているけど顔は笑っていて、「先生すごく楽しかった」と言う姿を見て、僕も初めての感情になった。
こういう経験や思いにさせてくれるのも、子どもたちなんだなと思った。

【地域の人との関わりについて】

・大学の講義の一環で、（高知県内の）小学校の行事や授業に参加させてもらったとき、何だか地域の人たちも一緒に子どもを育てているという感じがして、こういうところで働いてみたい、高知で就職しようと思った。

・高知に来てよかったなと思うことがある。親だけではなく、地域の人とすごく関わり合っていて、その姿を見て、そこの一員になれたらいいなと思った。

・教員になってから、地域の人と関わるということを学び始めた。
地域の人に支えられて生きているということを大人になる前に分かっているか、いないかは大きく違うと思う。
今生徒たちには、総合的な探究の時間とかに、いかに地域の人が支えてくれているか、感謝の気持ちを持ち過ごすことを伝えていこうと意識している。

【学校における働き方改革について】

・県が実施する研修はいつも参加するのが同じメンバー。若い先生に聞くと、「部活動も補習もあるので行けない」と言われた。本当に忙しいのだと思う。
研修はとても労力をかけて設定をされていると思うが、それに比べて参加者が少ないという状況が気になる。

・研修に参加したいという思いはあっても、それに行ったら、別の人が学級に入らなくてはいけない。でもその別の人がもう学校にいないという状況である。

・１年目、研修だったり、日々の授業の準備だったり、いろいろやらないといけないことがある。業務量と、それをこなしていくスキルのなさが、大変だなと日々感じている。

西部会場

令和６年８月２６日（月）13:30～15:30　県立中村特別支援学校　視聴覚室で開催
若年の小学校教諭と養護教諭、中学校教諭、高等学校教諭、特別支援学校教諭の５名の先生方と長岡 県教育長が対話

【先生になって「やりがい」を感じた話】

・こんなに誰かの人生に、こんなに深く関われる仕事って、ほかにないと思う。

・担任や部活動の顧問をさせてもらえて、何か節目のときに、手紙を頂いたり、話に来てくれたりとかすると、やっぱり報われるような気持ちになる。大変だったことがあればあるほど、ちゃんと返ってくる。そこで頑張っていこうと、いつも思う。

【先生になって「大変」だった話】

・やりがいがあるからこそ辞められない仕事だけど、でもその反面、怖さもある。言葉一つでその子にどんな影響があるのか。自分の態度が、子どもにどう伝わっているのか分からなくて、やっぱり怖いなと日々感じる。

・県の若年者タイムマネジメント研修で講師の先生から、「先生たちは幸せになっていいんですよ」と言われて、うるうるとした。もっと自分の子どもと過ごす時間も必要だなと、すごく思ったきっかけになった。切り替えが大事。ずっとエンジンはつけたままだと、疲れてしまう。

【県外出身の先生が思うこと】

・高知は格段に、保護者の方たちがあったかいと、すごく感じる。とにかく優しいし、話を聞いてくださる姿勢が、どの保護者にもある。

【ICTの活用について】

・ICTは効果的なものとして、全校あげて使っているが、その機器を使うことによって、逆にちょっと負担が増えている先生もいる。得意な先生は毎回授業で使っていて、校内で格差が出てきている。

・校内研修でICTの使い方を共有して、教員同士で話し合いながら学習し、それを子どもたちに伝えている状況である。

・ICTを使うことが目的にならないようにと言われている。効果的な利用の方法について、よく使っている先生に聞いている。

・ネットリテラシーの部分で、子どものトラブルも結構増えている。そういった部分の指導も難しい。一方、人前で話すことが苦手な子も、タブレットで気持ちを表現できたり、作りたい物を製作できたりするなど、すごくいい効果も特別支援学校ではある。

【学校における働き方改革について】

・娘が産まれ、育児休暇をとるが、この先も教員を続けていく中で、子育てと教職の両立ができるか、すごく不安である。

・育児休暇をとられる男性の先生もいるが、なかなか代わりが見つからないみたいな話も聞くと、休みにくい。（自分の）子どもといる時間は今しかないと思うので、すごく大事にしたい反面、生徒たちのこともあるので、なかなか振り切れて考えられない。

・制度的な部分で、日数を増やしてもらうとか、休んだ分を代わりにやってくれる方に手当がつくなどがあると、休んだ側としては、気持ちの整理がついていくのかなと思う。休みやすくなる仕組みの一つになる。

・休み時間に子どもたちと向き合って遊んであげたいと思ったけど、そんな時間も実際ない。忙しいと分かっていながら教員になったけど、ちょっと違ったという現実もある。教員には部活動など、それぞれの忙しさがあると思う。

・若い先生で授業準備がなかなかできないという方が多いので、校内の先生が今までに作ったスライド、ワークシート、指導案を全部教科ごとにまとめて共有できるポータルサイトを作った。そういう共有できる仕組みが学校にできたら、もっと楽になると思う。

保育所・幼稚園等の若年職員との対話 いただいた意見等（一部抜粋）

令和６年９月６日（金）に、保育所・幼稚園等の若年職員５名と、長岡 県教育長と対話（意見交換）を行いました。

【保育者になった理由】

・学生の頃の実習で、子どもたちに関わったのがきっかけ。子どもたちの成長を近くで見られるよさや、子どものことが好きなのでこの仕事に就きたいと思った。

・はじめての園で泣いていた時、担任の先生がずっと一緒にいてくれて、それがすごく嬉しくて、安心した。その先生に憧れて保育士になった。その先生の記憶が今も鮮明にあって、あの時、その先生がいてくれてよかったと思う。

・中学生の職場体験で保育所に行ったことと、大好きないとこのお姉ちゃんが、幼稚園の先生をしていたことがきっかけである。高知だったら働く場所もあるかなと思って選んだ。

・母も保育者で、小さい頃から仕事をしている母の姿を近くで見ていたから、身近に感じる職業であった。今でも悩んだこととかは母に相談できる。母は、一番憧れの人。

【保育者になって思うこと】

・やっぱり子どもと関われることがすごく楽しい。成長を近くで感じられることは特別なことで、みんなができることではない。

・子どもたちは、毎日毎日同じという訳ではない。昨日はできなかったけど、今日はできた。できたときをお互いに楽しんだり、いろんな発見があったりとかするので、それが見たいし、一緒に喜びたい。

・担任は子どもたちと毎日一緒に過ごしていて、一番子どものことを知っているつもりで、全然理解できていないと感じることがある。そんなときは止まってみて、子どものしていることをじっくり見ることにしている。

・すごく楽しい仕事だけど、やっぱりその分、子どもという大事な存在をお預かりしているので、悩みながらしている。

・気にかけてあげたい子どもが多いと感じる。だけど、担任一人では見られないし、目が届かない。子どもに必要な支援は、本当に行き渡っているのかな、小学校に向けて大丈夫かなと、心配になることがある。

・同じぐらいの経験年数の保育士さんと話す機会が、本当にない。同じような悩みを聞いたり、共感できたり、そういうことができる機会があったらよい。

【働き方改革について】

・仕事がたくさんあるので、時間内にやり遂げるというのが大変で、やっぱり持ち帰ってやる保育士もたくさんいるのかなと思う。

・先輩方みたいに効率よく仕事ができるようになったら、時間内で終わるかもしれないけど、経験を重ねないとなかなかスムーズにはできない。

・働き方改革と言われるようになり、大分仕事が少なくなったみたいな話は、先輩たちから聞く。

・人それぞれだと思うが、パソコンで早くできるかと思ったら、手書きの方がパパッとできる。
パソコンでいろいろ作るのに、逆に時間がかかったみたいな声を、周りの保育士たちからも聞くことがある。

PTA役員との対話 いただいた意見等（一部抜粋）

令和６年９月７日（土）に、PTA役員（小・中学校）９名と、長岡 県教育長と対話（意見交換）を行いました。

【子どもたちや学校の様子について】

・中学校３学年ともすごく落ち着いていて、集中して話を聞いてくれた。しかし、自分で手を挙げて発言をすることは、少し苦手。

・感動を与えるぐらいにみんなが協力をして、調和を保って、一緒に頑張ろうというチームワークがとれる面もあり、子どもの変化はすごいなと思う。

【PTAの役員をやっていて楽しいと思うこと】

・PTAの役員をする楽しみは、子どもたちが自分のことを覚えてくれること。先生も、子どもたちの記憶に残ってもらいたい。

【部活動の地域移行について】

・部活動の地域移行について、各市町村ごとに任せられているように感じる。子どもが減っており、部活動を維持することが難しくなっている。先生の数が減ってくると当然部活動まで面倒を見ることができない。地域にも教える人がいない状態。今後どうなっていくのかとすごく不安を感じている。

【子ども食堂について】

・子ども食堂は、子どものためだけではなく、地域の人が集まる場という意味合いもある。地域で解決していく問題だと思うので、自分たちPTAから、地域や社会福祉協議会に声かけが必要かもしれない。

【学校の先生を見て思うこと】

・最近、先生は子どもとコミュニケーションをとる暇がない。やはり先生の残業時間を減らすなり、仕事を減らしてほしい。そのためには、PTAが協力しないといけないことも沢山あると思うが、先生は「そんなことないです」と謙虚に言ってくれるので、どう助けていいのか分からない。

・もう少し私たちPTAのPをもっと使ってもらう環境にした方が、先生たちも本来の仕事がしやすくなると思う。先生たちは非常に保護者に気を遣いすぎていると思う。

・残業時間を削減した方がいいことは分かっているが、本当の先生の役割をやりがいを持ってやれるような環境であればいい。今の先生は、おそらく保護者のことばかり気にして仕事をしていると思う。その環境をなくしたら、もっと思い切って、生徒に指導し、コミュニケーションがとれるようになるのではないか。そういう意味で言うと、今のPTAの一番の役割は、保護者を指導することではないだろうか。先生が思い切って指導ができる環境を作ってあげないと、先生のなり手も少なくなる。

・時間の確保も必要であるが、先生たちの心のゆとり、メンタルケアもすごく大事だと思う。

【保護者を見て思うこと】

・私たちのときの勉強という概念はIQだった。今からはEQと言われる非認知能力、考える力、自分で学ぼうとする力、相手とどう距離をとるかということが必要になってくる。そういうことを親が勉強したらいいと思う。

・私は保護者側の立場ではあるが、子どもの前で、親が先生にものを申すのをやめてほしい。先生より親が偉いんだと思うと、子どもは今度先生に叱られたときに、「親に言う」となってしまう。

・保護者も研修会などに参加をして、インプットだけではなく、アウトプットの機会を増やし、コミュニケーションスキルを学ばないといけない。高知県全体で、働く人たち、子どもたち、地域でそういうことを学べる機会が増えるといいと思う。

経済界の代表者との対話

いただいた意見等（一部抜粋）

令和６年９月１７日（火）に、経済界の代表者６名と、長岡 県教育長と対話（意見交換）を行いました。

パシフィックソフトウエア開発株式会社	中城　一明	代表取締役社長
株式会社ヒワサキ	日和﨑　守	代表取締役社長
ミタニ建設工業株式会社	三谷　剛平	代表取締役社長
株式会社ＳＫＫ	森山 万里子	管理部長
ニッポン高度紙工業株式会社	溝渕　安隆	管理部長
株式会社ケンジン	山中　崇之	代表取締役社長

これからの高知県の人材育成について

【現状】

・自己肯定感が低い子どもが多いのは、自信がないのではないか。

・社会性が低く、人との付き合い方でこじれてしまう人が増えてきた。組織としてやる事に支障をきたしている。人に対して感謝することも少なくなった

・今は、答えをすぐにインターネットで導くことができるので、考えることをしない。

・社会で求める人物像が変わってきた。

・世の中には、いろんなルールがあり、みんなルールを守る。しかし、ルールを変えていく力がない。

・若手の社員で頑張る人が少なくなっていて、自分の限界をすぐに決める。

・５年仕事をやって見えてくる（答えにたどり着く）世界もある。しかし、２、３年で結果が出ないと、この仕事は自分に向いていないいと若手の社員は言う。上の世代も同じように、そういうふうに思ってしまっている。

・自分の子どもの教育を見ると、地域のことを知ろうとする授業が増えている。

・ここ数年、県立高校出身者は、高知のために働きたいと言う子が増えてきている。地元の愛着ができている。

・１次産業の担い手が不足している。自分たちの子どもに自分の仕事を勧めない。大人が、悲観的になっているところもあるのではないか。

・教育現場だけでなく、親の意識も変わらなければならない。親、地域、社会が変わらなければならない。

【今後、必要だと思うこと】

・主体性を引き出す教育や自己肯定感を持たせる教育が必要である。

・主体性のある取組も必要だが、学力も必要である。

・一人一人が社会性を持つ必要がある。

・大量生産大量消費の時代から、欲しいものがない豊かな時代になっている。その中では、新しいニーズを掘り出していくことや、答えのないものを出していく必要がある。

・自分で進路を決める子どもを育成して欲しい。

・県内大学に進学をするならば、学力サポートと大学側の県内枠設置等も必要である。

・地元愛を醸成させるためには、地域の歴史文化、地域コミュニティを密にする、産業の振興、誇りを持たせる（シビックプライド）が必要である。

・企業は、福利厚生が良いと言うことに逃げている感じがする。本当は、仕事の本質が大事である。

・高知での良い暮らし方を伝える必要がある。そのためには、魅力的な企業があるというPRも必要である。

・高校生のインターンシップは、現在１～３日。最低10日欲しい。

・企業と学校の先生方との交流会も必要である。

⇒**企業とさらに連携して教育を進めていきたい。**
（教育長）